

「80年代から現代までブロードウェイミュージカルの研究」

村 川 英

【要旨】

ブロードウェイミュージカルについては、翻訳本やハリウッドミュージカルで紹介されてきたが、実際の舞台を見ての研究は、日本においてはまだ、一部の批評家やライターを通じて紹介されているが、全体像をつかむのは難しいのが実情である。

幸い 1980 年代から現在まで、代表的なミュージカルをブロードウェイで見てきたので、そのレポートを兼ねて、研究調査をまとめておきたい。

この研究のテーマは、ブロードウェイのミュージカルは、アメリカの現実をどのように表現し、それをミュージカル特有の表現でどのように描いたかを、筆者の見た舞台や、インタビューを通じて考察したものである。

キーワード：ショーボート、カラーパープル、ウエストサイドストーリー、レント、ハミルトン

まず、私がブロードウェイで見たミュージカルは、1981 年のミュージカル「キャッツ」から 2016 年までの「ハミルトン」までである。この間 35 年ほどの時間が流れたが、1981 年からは、ほぼ毎年のように、リンカーンセンターで開催されたニューヨーク映画祭の出席を通じて、ブロードウェイやメトロポリタンオペラを観劇するという機会に恵まれた。そして 1987 年からは 8 ヶ月ほど、プリンストン大学に滞在していたので、アメリカの日常生活からニューヨークのエンターテインメントの世界を比較して考えることも出来た。このノートでは各メディアの関係も踏まえて、このレポートを綴っていきたい。

9 月のインディアンサマーの素晴らしい時期は、オペラやブロードウェイのニューシーズの幕開けの時期でもある。というわけでこの経験が、ミュージカルへ魅了されたきっかけになった。

ただ私の専門は映画だったので、ミュージカルだけに夢中になったわけではない。私が学んだ早稲田の演劇学科では、映画の他に演劇に惹かれ、アメリカ演劇ではエリア・カザンやテネシー・ウィリアムズ、アーサー・ミラーに関心があった。

その理由としては、日本ではミュージカルが始まるのは、戦後は東宝ミュージカル「マイ

フェアレディ」(1963)、「王様と私」(1965)、「サウンド オブ ミュージック」(1965)、「屋根の上のヴァイオリン弾き」(1967)、「ラマンチャの男」(1969) からである。

初演を追いかけるほどのミュージカルファンではなかったが、演劇学徒としてはすべて見た。

中でも、現・松本幸四郎がブロードウェイで演じた「ラ・マンチャの男」は、初めて英語で日本人が演じるミュージカルとして話題になった。(演劇科の同級生であった幸四郎のブロードウェイ進出は、いやがおうでもブロードウェイの存在を意識させられた) こうしたこともあってブロードウェイというミュージカルの舞台には、大いに関心を持ったわけである。東宝ミュージカルの登場は、戦後のエンターテインメントの世界にブロードウェイミュージカルを定着させる効果があった。

もっとも実際のブロードウェイの世界は、なじみのない世界だったと言わなければならない。だが、戦前からミュージカルに関心のあった日本人にはフレッド・アステア、ジンジャー・ロジャース、シド・チャーリーらが出演する「トップ・ハット」や「バンド・ワゴン」などに魅せられ、戦後は「雨に歌えば」に代表されるジーン・ケリーなどの MGM ミュージカルによって、ミュージカルの存在は、映画ジャンの中で大きな存在を占めていた。ミュージカル映画の歴史を考えてみれば、舞台をそのまま映画にした音楽映画からエルンスト・ルービッチら欧州勢によるオペレッタ映画が登場している。(日本でもマキノ正博が戦前に作った「鴛鴦歌合戦」(1939)がある) さらにフレッド・アステアら本格的なダンサーがハリウッドに雇われて、ミュージカル映画が本格的に始まった。MGM ミュージカルではダンサーを真上からカメラで見下ろす独特なバークレー・ショットで知られるバスビー・バークレーの仕事を通じて、ミュージカルの魅力は日本に伝えられたわけである。こうしたミュージカルの素晴らしさは、日本では熱烈なファンに支えられていたが、ミュージカルの醍醐味は、一流のダンサーや歌手による実際のエンターテインメントの世界に触れなければという印象を持っていたので、アメリカの現実を描いたミュージカルを強く意識するようになったのは、実際にブロードウェイの舞台に触れてからだった。

80 年代からのミュージカル概観

80 年代から現代までのミュージカルを考える上では、ミュージカルスタイルの変化と、その内容のメッセージ性を中心に考えてみたい。これまでのミュージカルの歴史をざっとふりかえるならば、オスカー・ハマースタイン 2 世とリチャード・ロジャースによる「オクラホマ」、「回転木馬」、「南太平洋」、「王様と私」「サウンド・オブ・ミュージック」などが思い浮かぶが、親しみやすい誰でも口ずさめるような歌とダンスを取り入れ、これらは現在でも上演されるミュージカルとしての生命を保っている。

その後はジェローム・ロビンスとバーンスタインの「ウェストサイドストーリー」、スティーヴン・ソンドハイムとバーバラ・ストライドサンドの「ファニーガール」、「ハロードーリー」、

ジェローム・ロビンスの「屋根の上のヴァイオリン弾き」、ジョセフ・ハップの「ヘア」、ソンドハイムとハロルド・プリンスの「カンパニー」、ハロルド・プリンスの「キャバレー」、ボブ・フォッシーの「シカゴ」、「オールザット・ジャズ」などを見てきた。

思い浮かぶだけでも、ブロードウェイやロンドンウエストエンドで見た作品名だけあげても「ピピン」、「ジーザス クライスト スパースター」、「スウィニートッド」、「エヴィータ」、「ナイン」、「レ ミゼラブル」、「オペラ座の怪人」、「サンセット大通り」、「キス ミー ケイト」、「サンディ・イン・ザ・パーク・ウィズ・ジョージ」、「グランド・ホテル」、「ライオン・キング」、「アイダ」、「コンタクト」、「プロデューサーズ」、「ヘア スプレー」、「カラー パープル」、「ボーギーとベス」、「ニュージーズ」、「ブック オブ モルモン」、「紳士のための愛と殺人の手引き」、「マンマ ミーア」、「ジャージーボーイズ」、「ビューティフル」、「ビリー・エリオット」、「マチルダ」、「ワンス」、「ファン・ホーム」、「ウェイトレス」、「キンキーブーツ」、「ハミルトン」などがある。

これらにミュージカル映画まで含めれば、かなりの数のミュージカルに触れたことになる。

とりあえず、80年代から現在の「ハミルトン」まで、ブロードウェイミュージカルの世界をまとめてみることにする。

ミュージカルを通じてアメリカを考えるとというテーマは「コーラスライン」を見てから強く意識するようになった。これは私がアメリカに関心を持つようになって、エンターテインメントの世界からアメリカという国や文化を知りたいという願いが強くなったことと関係している。その意味では「コーラスライン」は、まことに格好の舞台だった。様々な移民から構成されているアメリカを象徴するように、黒人、アジア系、プエルトルコ系、さらには世代別も含めて、様々な人種が、オーディションを受ける過程をミュージカルに仕立てた。このスタイルはバックステージものと呼ばれるジャンルに入るが、戦前のミュージカル映画「42番街」からあり、「プロデューサーズ」、「オペラ座の怪人」などミュージカルの舞台裏を描いた作品は、きわめて人間臭いドラマとなっている。「コーラスライン」も、舞台成立までのプロセスを見事に描いており、その意味ではバックステージものにはいるだろう。(小山内伸は「進化するミュージカル」(論創社 2007 年)の中で、「メタ・ミュージカル」という概念を使っている。これは「メタ・シアター」の考え方で、ミュージカルのストーリーを進めながら、同時にミュージカルに対して俯瞰的(批評的)視点を持つ作品に当てはめている)「プロデューサーズ」は、コメディタッチだが、ミュージカル業界への批評的な視点を持つ。考えてみれば大変辛口なバックステージものである。「コーラスライン」は、ミュージカルの現実の厳しさと、ニューヨークに生きている若者の世界をリアルに感じさせた。このオーディションは、演出家が応募者に、彼ら自身のことを語らせ、同性愛者や家庭問題、将来の不安などを暴き出しているところがユニークである。

そのプロセスに、物おじしないアメリカ人の性格や、自己主張を含めて、当時の若者の等身大の姿が描写されてゆく。大人数から 17 人に絞られてゆく中で、登場人物と演じる俳優た

ちの人生が重なり、現実感と迫力が圧倒的な舞台だった。この時はブロードウェイの劇場に慣れていないせいもあって、日本のような大劇場に比べると、小さく感じられ、しかも磨き上げたようなキンキラキンの感覚ではなく、どこか手垢にまみれたような劇場の雰囲気又何とも言えないダンサーたちの悲哀を醸し出していた。従ってリチャード・アッテンボローによって映画化された「コーラスライン」は、よく出来ているが、どこか淀んだような空気感が足りないような印象を持った。

私自身にとってもはじめて訪れたニューヨークという見知らぬ土地で、オーディションを受ける若者の姿は、現実の若者姿に重なり、忘れられない迫力で迫ってきた。同時に切れ味鋭いダンスのレベルの高さに圧倒させられた。

「キャッツ」も猫の物語というユニークな設定が面白かった。T. S. エリオットの猫の詩集に曲をつけたものだが、これを演出したのが、ロイヤル・シェークスピア劇団に所属している気鋭のトレヴァー・ナンだったことが印象に残っている。演劇学徒にとっては、ピーター・ブルックによる演劇界の伝説になった「真夏の夜の夢」が73年に来日公演を果たし、気鋭の新人トレヴァー・ナンが「スィーニートッド」を演出し、日本でも早稲田『自由舞台』の先輩である鈴木忠志が商業演劇に進出して、帝劇で松本幸四郎（当時は市川染五郎）と鳳蘭でこれを演出し、来日したトレヴァー・ナンと対談などをやっていたからである。

80年代を考えると、同性愛とエイズの問題がクローズアップされてくる。ブロードウェイの転換期を「ショーボート」、「ウエストサイドストーリー」を中心に考えてきたが、同性愛とエイズを考えると、「レント」が大きな比重を占めてくる。このあたりが80年以降のミュージカルの構図を考える上でキーポイントになってくるかもしれない。

「ウエストサイドストーリー」とジェローム・ロビンズ

ここで80年代以降の作品とは違うが、ジェローム・ロビンズと「ウエストサイドストーリー」を取り上げてみたい。筆者がジェローム・ロビンズの世界に接したのは80年代に入ってからであり、ロビンズにインタビューしたこともあって、アメリカとブロードウェイを考える時、一つの原点になった。ミュージカルスタイルの変化と社会に反抗する若者というテーマからも大きな意味を持つ作品となった。

1957年にジェローム・ロビンズとレナード・バーンスタインのコンビによる「ウエストサイドストーリー」は、それまでのオスカー・ハマースタイン2世とジェローム・カーンが作り上げた世界とは違う、都会の中で生きる若者世界をビートの利いた音楽とダンスで、それまでのブロードウェイミュージカルとは違う作品を作り上げた。「ウエストサイドストーリー」のすごさは「ロミオとジュリエット」の普遍的な悲劇性を謳いあげながら、50年代以降、東京や、ローマ、ロンドンなど世界中に広がる若者革命の時代を先取りしている時代を読み取る先見性ではなかったか。

オスカー・ハマー斯坦 2 世とジェロームカーンの「回転木馬」、「南太平洋」、「オクラホマ」、「王様と私」などがリバイバル作品として評価されているのに比べ、「ウエストサイドストーリー」は、今なお現代の物語としてリアリティを見せている。都会化した世界中のさまざまな場所で今なお、新鮮に演じられていることが、この作品の価値を証明しているといえるだろう。

私自身、日本では映画版で、ジェローム・ロビンスやバーンスタインの才能に触れていたが、実際にロビンスの舞台をブロードウェイで見たのはこれまでの彼の仕事をまとめた「ジェローム・ロビンスのブロードウェイ」だった。この作品は 1989 年のトニー賞の作品賞を受賞。これまでロビンスが振付けをした「ニューヨーク・ニューヨーク」、「シャル・ウィ・ダンス」、「トラデッション」など「オン・ザ・タウン」や「屋根の上のヴァイオリン弾き」、「王様と私」の作品からだが、「ウエストサイドストーリー」からの作品が「クール」、「アメリカ」、「サムホエア」など一番多かった。この作品は 1991 年に東京でも公演を行ったので、そのときに来日したジェローム・ロビンスから直接話を聞くことが出来た。

禅僧のような静かなたたずまいの大変、魅力的な人物だったが、インタビューが実現するために 3 回もアポイントメントが変わり、インタビューが難しい人ということも理解した。ロビンスの名前を有名にしたのは「ファンシー・フリー」というバレエ作品（後にミュージカル「オン・ザ・タウン」と名前が変わり、彼のブロードウェイデビュー作となった）だが、バーンスタインの出会いはロビンスが 24 歳の時で、バーンスタインも 20 代の無名の時期だった。すぐにお互いの仕事が気に入り、出会ってから 10 年の間で素晴らしい仕事をするようになる。

ロビンスはこの時期の二人の仕事を次のように話している。「やはり、印象的だったのは「ウエストサイドストーリー」です。あの時は実にオープンな雰囲気で作成が進められた。仕事を分担してやるのではなく、共同でひとつの作品をつくる、という雰囲気でした。いつも仕事場には、原作者も、作詞家のソンドハイムも、そしてレニーもいた。ソンドハイムが「あつ、ぼくはここを歌にできる」といえば、レニーがすぐに「それはクインテッド（五重奏）にできるよ」と応じたものです。本当にみんなが協力して作った共同作品でした。

私たちはとても仲が良くて、いい関係だった。彼は私のミュージカルに対する能力とセンスを信頼してくれました。実に繊細な細やかな神経で、私の仕事を見ていた。だから私はレニーが作った音楽を聴くとすぐにそれに振りをつけてみせたくなった。私もレニーの音楽を 100% 信頼していたのです」（週刊朝日 1991 年 5 月 3 日号 筆者インタビュー）

このミュージカルはプエルトリコからの移民とポーランド系グループの若者の対立という現代にも通用する移民の問題を提供している。同時に「マリア」、「トゥナイト」、「アメリカ」、「クール」、「サムホエア」など名曲ぞろいのミュージカルである。特に決闘を前にして、それぞれが思いをこめて歌う五重奏「トゥナイト」は、実に素晴らしい。

ジョージ・チャキリスやリタ・モレイノらによるダンスナンバーもそれまで以上にジェロー

ム・ロビンスのモダン・ダンスのセンスが発揮された。これもロビンスが所属していたアメリカン・バレエ・シアターで培ってきた新しい感覚だった。そのモダン・ダンスのセンスとビートのきいたジャズを使った音楽で、まさにジェローム・ロビンスとバーンスタインのコンビが作り上げた世界だった。

実際の舞台を見ていない人間にとっては、こうした形のアンソロジーはとても有難いものである。ミュージカル映画も参考にはできるが、舞台のナンバーを全部、使っていなかったり、変えている場合も多いので、振付した本人が監修している舞台は安心してみる事が出来る。

宮本亜門はこの舞台について「ロビンスさんはブロードウェイの歴史を作り上げた人だと思います。僕のお手本のすべてがある、といい。今回の日本公演でも、ダンスシーンはすべてが素晴らしかったのですが、特に、噂に聞いていた「ハイ・ボタン・シューズ」と「ジプシー」のボードヴィル・スタイルが面白かった。日本ではミュージカル・コメディを真面目に考えすぎる傾向がありますが、もっと余裕をもってベーシックな笑いやギャグを大事にしたい。それが基礎にあって「ウエストサイドストーリー」という名作にたどり着いたと言うことを忘れたくないですね」(前提書 週刊朝日より)

これらについてロビンスは次のように語っている。「私はドラマチックな要素をつかみ、それを舞台で表現できるのが巧みな演出家だと思う。ドラマチックな要素にはシリアスな面とコメディの両面があります。20年間、ブロードウェイでミュージカルの仕事をしながら考え続けてきたのは、そのことです。その間、私はバレエの仕事も同時進行させていましたが、シリアスな部分はバレエで、ユーモラスな部分はミュージカルで、というわけです。

しかし「ウエストサイドストーリー」のときは違いました。シリアスなものとコメディを融合させて一緒にした。これは当時としては、かなりの実験でもあった。これまでのミュージカルはただニコニコ笑って面白ければいい、というのばかりだったけれど、これは「ロミオとジュリエット」を題材にした悲劇でした。ミュージカルを悲劇で表現できる、という発見を私たちはしたのです」

黒人ミュージカルの変化

80年代は黒人ミュージカルの台頭が、オバマ大統領登場に象徴されるようにオヴァーラップして新しい黒人ミュージカルを作り上げたといっているだろう。

とりあえず、それ以前の黒人ミュージカルの歴史を見てみよう。現在でも人種差別の現実を突きつけた画期的な作品として評価されている「ショーボート」がある。私はこれを1951年度版の映画で見ているだけだが、ジェローム・カーン作曲、オスカー・ハマースタイン2世作詞の名作である。80年代のミュージカルを考える時、オバマ大統領登場に象徴される黒人たちのパワー・アップとそれまでの人種差別がミュージカルを通じて、より鮮明に表現さ

れてきた。これを 80 年代ミュージカルの特徴と見ているが、それをさかのぼれば「ショーボート」で明らかにされた黒人混血女性の問題がある。このミュージカルはミシシッピー川を運行する劇場船「コットン・ブラッサム号」を経営する芸人一家と、そこで働く芸人たちの 40 年間に及ぶ人生模様を描いたものだ。この南部深奥部、ディープサウスには、過酷な労働に従事する黒人たちの綿花の荷揚げ人の世界が背景にある。「オールマン・リバー」など忘れがたい名曲がそろっている。このミュージカルは「コットン・ブラッサム号」で働く芸人一家とそこで働く芸人たちの愛憎劇が中心に描かれるが、私にとってはアメリカ南部の人種差別の現実、特に黒人混血女性の問題「ムラータ」の問題を突きつけた点が衝撃だった。このミュージカルはエドナ・ファーバーの原作にジェローム・カーンが惚れ込んで、ミュージカル化を希望したが、エドナは黒人と白人という異人種の結婚や、アルコール中毒、破綻する賭博師との結婚生活など、これまでのミュージカルが描いてきた明るく、楽しいミュージカルの題材ではないと渋ったという。

黒人問題の深刻さは、ニューオーリンズなどのアメリカ南部に行けば、その根深さと深刻さを否応にも意識せざるをえないが、このミュージカルでは、この問題が芸人たちの日常生活の中で明らかにされてゆく。話はこうだ。一座の看板女優のジュリーは、やはり看板俳優の白人男性スティーヴと結婚している。ジュリーは白人のような肌の白さをもっているが、黒人混血女性であり、州法では白人男性と黒人女性の結婚を禁じているので、州法違反ということで捜査官がやってくる。つまり、アメリカでは一滴の血でも黒人の血が入っていれば黒人とみなされ、州法違反として逮捕されるのだ。

（この問題はジェンダーの問題とも関わってくる。ジェンダー映画理論において、この「ムラータ」の問題が大きく、取り上げられている。この問題については、柴崎小百合の博士論文「公民権運動以降のアメリカ映画に表象された黒人混血女性」を参照させていただいた。

同じようなムラータの女性を描いた作品には、エリア・カザンの「ピンキー」がある。（この作品は 1949 年の作品。ムラータの問題については、アメリカ映画では 1915 年の「国民の創世」から始まっている）。カザンは戦後、こうした社会的な問題をいち早く取り上げてきた。この作品は、生まれつき肌が白い黒人女性のピンキーが北部の看護学校を卒業して祖母の住む南部の故郷に戻ってくる。ピンキーは白人の医師と恋仲であるが、黒人女性として生きることを選び、祖母が看護していた裕福な白人女性の遺産を引き継いで、看護学校を経営する道を選ぶのだ。ここでは黒人として生きる黒人女性の自立を描いているが、ピンキーと白人男性との恋愛の過程では、黒人混血女性の問題が大きく関わってくる。筆者がカザンにインタビューした時、カザンは「紳士協定」など、アメリカで評価されている一連の進歩的な映画をあまり評価していない感じを受けた。特に「ピンキー」は、ジョン・フォードがさまざまな理由をつけて、降りてしまい、困ったダリル・F・ザナックの頼みで引き継いだ作品のようで、カザンは自伝の中でも黒人混血女性の問題には全くといっていいほど触れていない。（「エリア・カザン自伝」朝日新聞社 1999 年）

ともあれ黒人を取り上げたミュージカルは、フォークオペラと冠したガーシュインの「ボーギーとベス」など傑作が多いが、近年になって「ドリーム・ガールズ」、あるいは現在の黒人差別を意識させられる「ヘア・スプレー」など多様である。「ヘア・スプレー」は、60年代、黒人差別が残るボルチモアでダンス好きのユニークな女子高校生トレーシーが、肥満を侮辱される自分の現実と戦いを挑み、同時にボルチモアの黒人差別にも果敢に戦って行く姿が、痛快なミュージカルとして描かれている。

2016年にはトニー賞でも話題になった「シャッフル・アロング」がある。(この作品は、1921年、黒人による初めてのミュージカルで、黒人市長選をめぐるコメディ。ハーレムルネッサンスといわれた黒人世界をタップやジャズ、ブルースなどを通じて風刺たっぷりに描いた。ジョセフィン・ベーカーなどが出演)。この作品は、演出、ジョージC・ウォルフ、タップアーティスト、セヴィアン・クローバー、主演のビリー・ポーターやオードラ・マクドナルドなど実力派ブロードウェイのゴールドデンコンビが手がけたことも話題になった。

この作品は2016年の夏に行ったときは、すでにクローズされて見る事が出来なかったが、タップやジャズ、ブルースなど黒人エンターティメントの豊穡さが圧倒的な迫力で人々を魅了したようである。

確かにブロードウェイミュージカル歴史の中で演じられた黒人ミュージカル光と影は、黒人文化の変化を感じさせるものがある。ガーシュインの不朽の名作「ボーギーとベス」は、圧倒的な歌唱力でブロードウェイの中で存在感を見せてきたが、ここではアリス・ウォーカー原作の「カラーパープル」を取り上げてみよう。

アリス・ウォーカーの小説「カラーパープル」は、ピューリッツァー賞を受けた作品で、1985年にはスティーヴン・スピルバーグの手で映画化されている。何よりも家庭の中でも居場所を持たない黒人女性の置かれた状況を衝撃的なまでに描き出されていた。

居場所のない黒人女性たちがどのようにして、そうした状況から抜け出し、人間としての尊厳を獲得していったのか。舞台は20世紀初頭の南部のジョージア。黒人一家の娘セリーが主人公だ。セリーは醜い女の子というレッテルを貼られ、養父である父親に犯されて、二人の子供を生む。しかも子供は父親の手で、どこかに連れ去られてしまう。セリーの支えは、美人で頭のいい妹のネッティだ。しかしセリーは農業を営むミスターに嫁ぐことになる。結婚といっても4人の子供の世話をし、掃除、洗濯、料理と召使のような生活だ。ミスターがセリーにも手を伸ばすことを知ったネッティを牧師夫婦に預けて逃がす。一方、ミスターの連れて来た、昔の愛人のシャグは、酒場の歌手で自立した美しい黒人女性だ。しかし世間的には「アバズレ」のレッテルが貼られている。牧師の娘だが、父親はシャグの生き方を認めなかった。ここに登場する女たちは、ミスターの息子で、セリーの義理の息子となるハーボの妻であるソフィアも悲しい運命を迫られる。ソフィアも市長夫人にたてついて、刑務所につながれ、刑務所から出ても、市長夫人に飼育殺しのようなメイドの生活を強いられるからだ。

ミスターの命令でシャグを世話するうちに、セリーはシャグの生き方に強く引かれてゆく。

二人はお互いを理解し、同性愛的な感情も生じてくる。偶然のことから、ミスターがアフリカで伝道師となったネッティの手紙を隠して、セリーに見せなかった事実が判明する。しかもセリーの子供2人もネッティによって無事育てられていることもわかってくる。

シャグの自立した生き方を見ているうちに、セリーも自分の力で生きて行く力を見出してゆく。セリーがミスターに逆らい、自分の人生を歩もうとする姿は、ソフィアを含めて、周囲の女たちの姿も変えてゆく。最後にセリーが高らかに絶唱する「I am here」が感動的である。

この作品は2005年には、ブロードウェイでミュージカル作品となった。私が見たのは2006年だったが、何よりもブロードウェイにはせ参じたといっている多数の黒人観客に圧倒された。ブロードウェイに集まる観光客や演劇愛好者と違う、黒人大衆の姿である。おそらくハーレムなどに住む一般の黒人たちの姿ではなかったか。自分たちの世界を見たいという素朴な熱気がブロードウェイに立ち込めて、そのオーラに圧倒された。

実はこの作品は2015年に再演され、2016年のトニー賞で主演のシンシア・エリヴォは主演女優賞に輝いた。私は2006年に見た初演版と2016年の再演版両方を見ているが、違う作品を見ているような印象を持った。すでにオバマ大統領が出現し、中産階級の豊かな黒人観客が普通に観劇するようになった「カラーパープル」には、初演時に駆けつけた黒人観客の熱気はなかったが、それに代わって自立する黒人女性の強さがアピールされていたからである。

初演では、痛めつけられる黒人女性の受難の物語に圧倒され、その悲劇的な世界を直視するのが息苦しいほどだったが、再演版には、前に向かって行こうとする力強さがあった。それを可能にしたのは、シンシア・エリヴォの圧倒的な歌唱力と、演出の違いだろう。ジョン・ドイルの演出は、シンプルで抽象的な舞台で、初演のリアルで陰惨な世界とは違っていった。(初演ではラ・シャンズもトニー賞主演女優賞を受賞しているが、シンシア・エリヴォとの歌唱力の違いも印象を変えている。初演の方は視覚的にリアルな南部世界を見せていた。ニューヨーク在住のミュージカル研究家の高橋友紀子は「もともとロンドンのメニエ・チョコレート・ファクトリーで制作されたもので、ジョン・ドイルが演出に加えて、脚本の改訂を手がけ、上映時間にして30分以上を削り、ダンスシーンもそぎ落としてドラマと歌を前に出したミュージカルに変えられました」と印象を語っている。

エイズを背景にした現代若者劇「レント」

80年代ミュージカルの特徴として同性愛の問題を取り上げたが、これは80年代に爆発的に広まったHIVの問題としてクローズ・アップされることになった。

同性愛をきっちりと描いたブロードウェイミュージカルは、以外に遅く登場している。映画の世界でもハードゲイを描いた「クリストファー・ストリート」が登場したのは1970年代で、ゲイの世界をファッショナブルに見せるゲイコミュニケーションの世界で、日常的な生活の中に登場する同性愛の世界の登場は、90年代に入ってからだった。

直接には 1983 年「ラ・カージュ・オ・フォール」の登場で、ゲイの世界をブロードウェイのオカマの世界という笑いの世界に包み込んで示した。これはジャン・ポワレの戯曲が原作（映画版「Mr レディ Mr マダム」がフランスで映画化され、日本でも舞台はこの名前が使われた。同性愛の世界といっても、その後のエイズの影響を描いた作品とは少し違う）

この物語は次のようだ。サントロペに住むゲイのクラブを営むジョルジュとアルバンは、ジョルジュの息子ミシエルを二人の息子のように育ててきた。そのミシエルが結婚することになり、恋人の家族と共に訪ねてくることになる。保守的な家族にゲイの世界を知らすわけにはいかない。シリアスな問題を抱腹絶倒のコメディに仕立てながら、同性愛の問題をまさに、ブロードウェイならではのエンターテインメントの世界に作り上げていた。

この作品は映画も含めて、同性愛を口当たりのいいエンターテインメントに包んでいるので、同性愛への偏見などがシリアスに描かれているわけではなかった。それが 90 年代に入ってから HIV（エイズ）の感染の拡大で、一気にドラマの中心的なテーマになってゆく。

その典型として「レント」を取り上げてみよう。

この作品はジョナサン・ラーソンが脚本、作詞、作曲したものだが、プッチーニのオペラ「ラ・ボエーム」を現代のニューヨークのイーストビレッジに生きる若者に置き換えて、当時ニューヨークを襲った HIV の恐怖を見せた。基本的には、若き芸術家と社会の葛藤という「ラ・ボエーム」の世界だが、麻薬中毒者や同性愛者などシリアスに描いたミュージカルだ。エイズの恐怖にさらされながら生きる若者の姿を通じて、同性愛への偏見や、若者への反感が理解されるような描き方になっているといいだろう。

ここにはさまざまなカップルが登場する。「ラ・ボエーム」に重ね合わせるならば、ヘロイン中毒でゴーゴードンサーのミミと HIV 感染している音楽家のロジャーのカップル。ロジャーは死ぬ前に、一曲の名曲を残して死ぬことを考えている。大学講師で「コンピューター時代の哲学」を教えているコリンズは、ゲイのエンジェルと恋に落ちてゆく。ユニークなカップルはハーバート大学出のエリート弁護士ジョアンヌとストリート・アーティスト、モーリーンのレスビアンのカップル。ここでモーリーンを演じているのは、「アナと雪の女王」を歌って現在人気絶頂のイディナ・メンゼルである。このレスビアンカップルの描き方は、これまでのレスビアンカップルの中で最もユニークで過激。二人の結婚式の途中で、ど派手な喧嘩をしてしまう感情むき出しのレスビアンだ。その他、映像作家のマークなど現代のアーティストが登場し、現代版「ラ・ボエーム」を展開する。

たまたま筆者は 1981 年からこのイーストビレッジがその当時、最もニューヨークらしさを象徴する場所として考えたので、「レント」の映画や舞台にも登場するトンプキン公園近くのアヴェニュー A から毎年、危険地帯のアヴェニュー D あたりまで探索した覚えがある。若者や東欧からの移民の人々が家賃が安い理由でこの地域に住み着いていたが、大資本がこの地域の再開発を狙って、こうした人々を追いつ出すという問題が生じていた。その辺の事情はこのミュージカルにも出てくるが、ニューヨークの人気スポットになったソーホーもそんな風に

して、おしゃれでファッショナブルな商業地に変わり、ソーホーに住んでいた若者や元の住民はそこから追い出された。「レント」もまた、そうなる寸前の若者の町と若者たちの不安感を描いている。「レント」には、はじける様な瑞々しい若者の生命観がありながら、エイズという業病の時代を背景としているだけに、「ウエストサイドストーリー」とは違った切実感があった。これからもずっと古典的な名作として長い生命力をもつのではないだろうか。

しかも7年かけてこの作品を作ったラーソンはプレビュー公演の前日に胸部大動脈瘤破裂によって急死するという悲劇にみまわれる。ラーソンが強調したのは、若者たちの思いを、若者の好むロックやビートのきいた音楽で、彼らの息遣いを感じさせるナンバーで歌い上げている魅力だろう。「シーズン オブ ラブ」「アナザーデイ」、「レント」などの曲が人々を魅了した。

ここまで80年代からのブロードウェイミュージカルを、アメリカ社会へのメッセージとミュージカルスタイルの変化というテーマで見てきたが、最後に2016年の最大の話作「ハミルトン」を見てみよう。

ヒップ・ホップ・ミュージカル「ハミルトン」

2016年のブロードウェイの話作はヒップ・ホップ・ミュージカル「ハミルトン」の登場で独占された。この作品は建国の父の一人、アレグザンダー・ハミルトンの生涯を描いたもので、「イン・ザ・ハイツ」でヒップ・ホップ・ミュージックの楽しさを見せ付けたリン・マニエル・ミランダの作品である。原案・脚本・作曲・作詞・主演まで全部一人でやった話作で、建国の父、アレグザンダー・ハミルトンのミュージカルがこんなに話題を呼ぶのは、折からのアメリカ大統領選と結びつけて、建国の父の生き方と現代のアメリカ政治が結びついて考えられているのだろうと考えていた。

8月上旬にニューヨークに出かけたが、話題はチケット入手の困難さばかり。ニューヨークではチケットの転売が認められ、人気の演目は値段が高騰するばかりで、通常ならば200ドルほどでいい席が取れるのに、プレミア価格では1300ドルなどと言われた頃である。

ただ主演のリンダ・マニエル・ミランダを含めて、オリジナルキャストが退いてからは、600ドルくらいとなって、入手可能になった。

このミュージカルの主人公は、ジョージ・ワシントンや、トマス・ジェファークソンらと共にアメリカ建国の父の一人として知られる人物である。独立戦争時にイギリスと戦った軍人であり、アメリカ合衆国憲法の元になった「フェデラリスト・ペーパー」を起草した政治家でもあり、ニューヨーク・ポスト紙を創刊した言論人でもあり、金融に通じ、初代財務長官として活躍。また「バンク・オブニューヨーク」を創業し、金融面に通じた財務家として知られる。

日本ではあまり知られていないが、アメリカの10ドル紙幣に彼の肖像が選ばれている重要

人物である。しかもジョージ・ワシントンなど建国の父といわれた政治家たちが良家の出身だったのに比べて、カリブ生まれで私生児として育ち、10代で両親を失い、孤児となった。そのハンディを巧みな弁舌と文筆の才能、頭脳明晰さと卓越した人間的な魅力で人生を切り開いていった一生がヒップ・ホップの音楽で綴られてゆく。

私はラップミュージカルと名づけたが、ラップの歯切れのいい言葉とヒップホップのノリの迫力が圧倒的で、日本でCDを聴いた時からその魅力に取り付かれた。これを作ったリン・マニエル・ミランダは、プエルトリコ系の移民である。ヒップ・ホップは、1974年にブロンクスでアフロアメリカン系、ヒスパニック系、カリビアン系の住民のパーティから始まった音楽らしいが、ミランダはこのブロンクス地域で育った。そしてロン・チャーナウの「アレザンダー・ハミルトン伝」に出会う。この本は2004年に出版されているが、プエルトリコ系の移民であったミランダにとって深く魅了されたであろう事は疑いない。

ヒップ・ホップはもともとラップ、DJ、ブレイクダンス、グラフィティの4つの要素から成り、血なまぐさいストリートギャング文化と関係があるといわれる。貧しい住民の住むブロンクス地区のヒップ・ホップがノリのいい音楽になっているのは、当然のことかもしれない。(もっとも、作者のミランダは、彼のヒップミュージカルの才能を示した「イン・ザ・ハイツ」では、むしろ穏やかなブロンクスの日常を描き、美しいラップミュージックを多用していた)

その生きのいいノリが「ハミルトン」には、巧く生かされ、そのスケールの大きさと音楽性が20年に一度くらいの傑作と評価され、話題になったわけである。

詳しく見てみよう。スケールの大きさとは、アメリカの建国の歴史という一大叙事詩が描かれている点だ。独立戦争でジョージ・ワシントンの副官として大活躍し、ヨークタウンの戦いで勝利。ハミルトンの理想を込めたスピーチもヒップホップで語られてゆく。つまり、生きのいいヒップホップでアメリカの歴史が語られてゆく痛快さが魅力となっている。

そこには英国のジョージ3世の登場や、独立戦争後のトマス・ジェファークソンとの抗争まで歴史のひとコマひとコマが、ビビッドに目前に繰り広げられているような臨場感がある。

その上、この叙事詩の中にハミルトンの私生活が語られてゆく。ハミルトンは、彼の人生が証明しているように、卓越した才能の持ち主で、チャーミングで社交的で人々を魅了したようだ。実際、ハンサムな男性で女性にもてたらしいが、スカイラー3姉妹の次女イライザと結婚するが、姉のアンジェリカとの交流、それから36歳の時、マリア・レイノルズとの不倫などの女性関係が描かれる。イライザの間には8人の子供を設けるが、長男は父親を侮辱した男との決闘で亡くなる悲劇に見まわれる。こうした私生活のエピソードが壮大な叙事詩の中に挿入されてゆく。ノリのいいメリハリの利いたヒップホップが生き生きと建国時のアメリカが描かれる中で、ハミルトンの悲劇的な私生活が魅力的なバラードで語られてゆく。

興味深いのは黒人系、ヒスパニック系、アジア系と様々な人種を起用したことだ。建国時に活躍した人物は、実際はこうした人々ではないが、こうした多様な人種を起用して、アメリカの活力を力強く印象付けた。場面展開が早く、ラップミュージックもダンスも素晴らし

い活力とエネルギーを舞台から注ぎ込んでゆく。そのスケールの大きさと活力のパワーは、これまでのミュージカルを凌駕する迫力をもたらした。しかもハミルトンという破格な魅力を持つ人物の一生もきっちり語る。彼の最後は政敵のアaron・バーとの決闘で49歳で亡くなるというドラマまである。

全体の構成は、このアaron・バーが語り手になって進められ、ラップで物語が綴られてゆく。こうしたスタイルについて小山内伸は「状況説明や政治論争などは早口のヒップホップが担い、ここぞという場面はポップスやバラードで掘り下げる。これは、叙唱のレチタティーヴォと旋律的なアリアとを区別するオペラと同じ音楽構造といえる」（『テアトロ 2016年11月号』）とし、この作品はミュージカルに音楽の役割分担を持ち込んだ点で革新的と見ている。

ヒップホップミュージカルのスタイルの完成度の高さによって、アメリカの建国史とハミルトンという魅力的な人物の物語が、現代によみがえった作品といえはいいのではないだろうか。

私は今回の大統領選挙と建国の歴史に触れた「ハミルトン」は、当然のごとく、これからアメリカの将来に向け、大きな話題を提供するのだと考えたが、そういう論点でこのミュージカルを論じたものは目にしなかった。むしろ、こうした視点は、日本人など外部の批評家の方が感じていた視点かもしれない。

ただ、最後にトランプ大統領と「ハミルトン」を巡って、面白い論争があったことを報告しておこう。実はトランプが次期大統領として決まってから、「ハミルトン」をめぐる、制作者とトランプ大統領の間で論争があった。マイク・ペンス副大統領が11月18日に「ハミルトン」を観劇した時に、観客席に副大統領を見つけた語り手のアaron・バーが、芝居が終了してから、「アメリカの多様性を認めるべき。」と語りかけ、観客がスタンディングオベーションで支持するなどの事件があった。何しろ、ジェファースンなど主要な人物は、アメリカのマイノリティが演じているのだ。出演者と制作者たちは、この声明を準備していたが、この時とばかりに、ペンス副大統領に向けて声明を読み上げた。これに対して、トランプ大統領は制作者やキャストを「無礼だ」とツイッターで非難、大きく報じられた。まさにアメリカのマイノリティがキャスティングされた「ハミルトン」は、トランプ大統領とは違うアメリカの多様性を見事に舞台で示したといっていいいだろう。

The History of Broadway Musical from the 1980s to the Present Age

Hide Murakawa

Abstract

This research is an investigation of Broadway musicals from the 1980s to the present age.

The main theme is the change of musical style and the message to the society during this period.

I started the study of the Broadway musical in 1981. I saw many important musicals.

It includes from *A Chorus Line* in 1981 to *Hamilton* in 2016. Other musicals are *Cats*,

A chorus line, *Cabaret*, *La Cage aux Folles*, *Hair*, *Sunday in the Park with George*, *Evita*, *Matilda the musical*, *Porgy and Bess*, *Chicago*, *Lion King*, *Les Miserables*, *Hairspray*, *Hair*, *The Producers*, *The Book of Mormon*, *The phantom of Opera*, *Pippin*, *Contac*, *Once*, *Gentleman's Guide*, *Mere Lies Love*, *Beautiful*, *Waitress*, *Fun Home*, *Hamilton*, *Kinky Boots*

I also researched on many musicals film And I referred to old masterpieces *Oklaoma*, *The Sound Music*, *Show Boat*, *Porgy-and Bess* about their style and story. As a result I picked up *A chorus Line*, *West Side Story*, *Show Boat*, *Color purple*, *Rent*, *Hamilton* for my study. I considered that these works have the characteristic of musical from 1980s to the present time.